

古代の皮革 4. 東・南アジア

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

インドと中国はともに世界四大文明の一つではあるが、皮革製品の遺物に関する報告は他のメソポタミアやエジプトとは異なりあまり無いと言える。しかし紡織を知る以前は、獣皮が衣料として用いられ、その後、絹織物や樹皮・茎皮の織物ができるようになっても、皮革は衣料のみならず、日用品として利用された。インドとメソポタミアは交易が活発であったこと、またシルクロードを通じて中国とローマの交易があったことから、皮革製品も交易を通じて相互にもたらされたと推定できる。

2. 中国

中国では絹織物は紀元前2750年頃から生産されたが、これと平行して特に中央アジアの北部地域の遊牧民は狩猟をしながら、馬や牛、ラクダを飼育しており、これらの皮や毛皮を防寒用の衣服や住いの包(パオ)の覆い、工芸品等に利用していた。殷墟で発見された甲骨文字には、蚕や帛などと共に裘があることから、絹織物、植物性の織物および獣皮製の衣服が用いられていたと言える。始皇帝陵や漢陵には、馬・犬・豚・鶏等の坑(陪葬した所)や明器(副葬の器物)があり、さらに兵馬俑の服装や馬具などからも当時動物皮の利用があったと想像できる。タクラマカン砂漠の埋もれた古代都市のニヤ遺跡からは、漢時代の木簡や種々の織物の切れ端と共に刺繍をした革製品の切れ端が出土している¹⁾。漢代に書か

れた「西京雜記」(劉歆著)では、裘は水に入りて濡れず、火に入りて焦げず、たいてい麕および狐兔等の毛皮を用いるとある。子羊や熊等の毛皮も使用された。周の冠服制度では、王・侯以外の者は狐白裘(狐の脇の下の皮を集めて作った衣)は使用を許されなかった。白狐の毛皮は前漢の司馬遷著「史記」にも記述され、こそ泥を使って白狐の毛皮を盗ませた「鷄鳴狗盗」という故事の元となった²⁾。なお最高級の毛皮は古今東西クロテンの毛皮である。外蒙古(現モンゴル)の匈奴の墓から、赤い絹布の縁をクロテンの毛皮で縁取りした上着やクロテンの毛皮とウールの帽子が発見されている³⁾。さらに革を張った形跡が認められる木製車輪の乗り物があった。なお古代エジプトの墳墓からも、革がタイヤのように取り付けられている戦車が発見されている。浅い舟形の靴が先秦時代より用いられ、漢の靴は楽浪(北朝鮮)や陽高(山西省)で、唐のものはトゥルフアン(新疆ウイグル地区)などで出土している。「説文解字」(漢の許慎著)では、履は足の依る所で皮なり、舟は履物の形とある。「三才図会」(明の王折著)では、靴は足を華るゆえなり、胡服(中国北方または西方の民族の胡人の服)なりとあり、元々は俑に見られるように騎馬の際に用いるブーツ状の深靴である。皮弁という冠は白鹿の皮で作られ、さらに皮船は牛馬の生皮で作るとある。「韋編三絶」という故事は孔子が「易経」を愛読して竹簡(竹の札)を綴じてある韋紐が三度も切

れたということであり²⁾、韋紐が孔子の時代すなわち紀元前6世紀頃使用されていたことを示している。古代の日本においても、紐類にはしなやかな鹿革が一般的に用いられた⁴⁾。なお「史記」ももちろん竹簡であった。竹簡を2本の紐で編んだものを冊といい、それを綴じ合わせたものを編と呼んだ。ちなみに紙の発明は紀元105年であり、一般的に使用されるのは4世紀頃であった。漢の武帝が白鹿の皮1尺四方をとり、その周囲に五色の糸の縫い取りを施して皮幣を作った²⁾。中国の紙幣の先駆けとなったが、40万銭と高額であったので、市場では使われず、王侯や皇族のあいだの賜物に使われたにすぎない。

中国で最も古い鎧は殷時代の皮製であり、胸だけを保護する短いもので、何枚かの皮を縫い合わせて作られていた。皮の頭巾のような兜もあった。春秋時代の中期になると、革製の札を綴り合せた鎧が使用され



図1 墓を護衛する陶製の兵士
(唐代以前)

た。犀や兕(水牛に似た一角獣)、牛の皮が使用された(図1)^{2,5)}。なお犀の皮は貢物の一つであった。戦国時代からは鉄製の鎧も使用されたが、革製の鎧も盛んに用いられた。その後、隋や唐の時代でも、皮革と鉄が使用された。皮革は軽量で柔軟性と機能性があり実用的であった。唐は日本海から中央アジアにいたるまで拡張したが、武将や兵達は犀や牛の甲冑を着けていたとされる。将官らは鉄製や鎖帷子風の鎧を着けていた。剣の柄には鮫皮を巻いて金銀や犀角で装飾したが、正倉院にもそのような刀剣がある。なお正倉院の鮫皮はエイ皮と最近判定されている。上流社会の若い武将は毛皮の女王と称される貂の帽子を被っていた。

内モンゴルのシリーンゴル盟出土の「金製狩猟文革帯飾り」は唐代のもので、革帯に突厥族の草原における狩猟生活を描いた金製の飾りが付いたものであり(図2)、類似品に赤峰市出土の「銅塗金牡丹文帯飾り」があり、これは遼代の契丹族のものである⁶⁾。革帯には弓や刀などの狩猟具を吊り下げた。契丹族は外交使節に種々のベルトを送る習慣があったといい、副葬品に銀製のベルトに金製の飾りを付けた同じような形のものがある。赤峰市からは遼時代の面繫・胸繫・尻懸の銅塗金飾りが副葬品として出土しており、これらには革帯の残欠があるものもある。中国の鞍は戦国時代から漢代にいたるものは革製であるが、三国・南北時代以降は木製鞍が流行した。チンギス・ハーン(1162?~1227)の墓に3点の木製金飾り鞍が祭られて、それぞれ生前の戦



図2 金製狩猟文革帯飾り
(唐代 内モンゴル出土 長さ155cm)

闘・狩猟・生活の際に用いられたものと伝えられている⁶⁾。なお紀元前6～3世紀のアルタイ地方の古墳からは、革やフェルト、トナカイの毛を用いた鞍が出土している。また内モンゴルで収集された陶製の元代の馬の鞍は革製と推定される。鞍の歴史では、紀元前9～7世紀のアッシリア人は敷物だけを馬の背に敷いていたが、前後を高くした革製の鞍は古代ギリシャやシベリアのバジリク古墳に見られる。

後漢時代の太鼓を脇の下に抱えた芸人の俑が成都から出土している⁷⁾。この太鼓は空洞の木に獣皮を張ったものと推定される。唐代の西安の墓に胡騰舞図壁画があり、そこには琵琶や箏篋、笛等を演奏しているなか、腰に革帯をし、黒い靴を履いた胡人が舞っている様子が描かれている(図3)。このような四弦の琵琶や箏篋は古代イランが発祥といわれている。これらの楽器は正倉院のものに極めて類似しており、西アジアの文化が中国を経てすなわちシルクロードを経て日本に伝わってきたことを示している。正倉院の琵琶の捍撥(撥の当る場所)は革製である。このような楽舞で琵琶や箏などを演奏する様子は北齊の墓から発掘された壺の文様にもある⁸⁾。「史記」にも、種々の鼓や筒を羊皮で包んだ雅、鞣し革の内に糠をつめた拊鼓などの打楽器が記述されている。また宋の都開封の絵や地図に鼓樓や鐘樓が描かれており、太鼓が時間を知らせるのにも使用されていた。

清朝の北京では、影絵芝居(影戯)が盛んに上演されていたが、影絵の起源は漢の武帝が夫人を亡くして悲しくしていたので、道士が帳を垂らして燭を掲げると、亡き夫人の姿が映ったという説がある。この人形は大きさにより牛やロバの皮を脱毛、乾燥してから、切り抜き、彩色して桐油を塗って制作した。なお宋時代初期には紙製のものもあったが、後には丈夫な羊皮を用いて彩色した。また北宋の都開封には瓦子という娯楽街があり、そこでは雑劇や曲芸、人形芝居などと共に影絵芝居が頻繁に上演されていた。

3. 朝鮮

朝鮮半島北西部の樂浪郡(現平城市付近)の漢代古墳から、革帯に付ける鉸や飾り鉸、把に鮫皮を巻いた痕跡が認められる刀、馬具や武具の革紐、裏側に額革や鼻革を張ったと推定される馬面などが出土している⁹⁾。3世紀初め後漢帝国が倒れ、中国の周辺支配が弱体化し、朝鮮半島において4世紀に至り古代国家が形成された。9世紀の新羅時代の冠服制度は唐の制度に準拠したものであるが、紫色の革靴(長靴)を履くことは、身分の高い人達にだけ許されており、履(短靴)に関しては、平民は革履ではなく麻履をはいた。腰帯や馬具などについても素材や装飾の規制があった。革の素材としては、牛・馬・鹿の皮が使用された。なお古代の日本においても、身分によって衣



図3 胡騰舞図壁画(模写)
(唐代 西安市の墓)

服や履物の素材や色は異なった。

4～7世紀の狩猟塚古墳（平安南道）などの壁画に、狩猟図や騎馬人物像があり、馬具や靴などに革が使用されていたと推定できる。

4. インド

インダス文明（前2350～1700）の栄えた地域からは武具とおぼしきものが出土していなく、戦闘が少なかったことが想像される。この時代の一般的な衣類は綿織物の巻衣か腰巻であり、多くは裸足であった。バラモン教が生まれた紀元前15世紀頃には、動物皮からの革製造がなされていた。鞣皮性のある阿仙葉木（アカシア属）やミロバラン（モモタナマ属）が豊富であった。紀元130年頃、首都をプルシャプラ（現ペシャワール）に置き、中央アジアからガンジス川中流域まで統治したカニシュカ王の立像（2世紀の作）がガンジス川上流のマトゥラーで出土しており、その姿は長いコートにズボン、革製の長靴という中央アジア風であった（図4）¹⁰。

北にクシャーナ朝、南にサータヴァーハナ朝が栄えた1～2世紀に経済活動が活発となり、インドからローマへ、胡椒などの香辛料、宝石、象牙細工等が送られ、ローマからは、ぶどう酒やオリーブ油、ガラス製品、陶器が送られた¹⁰。皮革製品の交易



図4 カニシュカ王の立像
（2世紀 マトゥラー発見）

は見当たらない。しかしながら時代が異なるが、マルコポーロの「東方見聞録」（1254～95旅行）では、多量の山羊や牛、犀、その他の獣皮を鞣し、世界で最も良質の皮革製品を船で輸出したとある。

5. まとめ

中国では古くから絹織物が使用されたが、革や毛皮の衣類も使用され、さらに靴や冠等にも使用された。革製の鎧や鞍もあった。朝鮮も中国の冠服制度をみならって朝廷では革靴を履いた。インドでも一般的な衣類は綿織物であったが、皮革の利用もあった。

文 献

- 1) 林梅村著, 川上陽介, 申英蘭訳: 流砂の記憶をさぐる, 日本放送出版協会 (2005) P. 115.
- 2) 司馬遷著, 近藤光男, 頼惟勤, 吉田光邦訳: 中国古典文学大系 10, 史記 上, 12刷, 平凡社 (1978) P. 18, 165, 201, 210, 318.
- 3) 梅原末治: 蒙古ノイン・ウラ発見の遺物, 東洋文庫 (1960) P. 50, 84.
- 4) 竹之内一昭: 延喜式から読み取れる古代の皮革, 皮革科学, 54, 111 (2008).
- 5) エトワート・H・シェファー: ライフ人間世界史 19, 中国, タイムインターナショナル (1989) P. 33, 176.
- 6) 丁勇 蘇東 邵清隆 張彤吉田順一: チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展, 東映 (2008) 図23, 29, 48.
- 7) 北海道近代美術館編: シルクロードの煌めき-中国・美の至宝, 北海道新聞社 (1999) 図19, 36, 43.
- 8) 砺波護, 武田幸男: 世界の歴史 6, 隋唐帝国と古代朝鮮, 中央公論社 (1999) P. 154.
- 9) 朝鮮総督府: 古跡調査特別報告 4, 樂浪時代の遺跡 (1927) P. 45.
- 10) 山崎元一: 世界の歴史 3, 古代インドの文明と社会, 中央公論社 (1997) P. 226.